

渋谷時代の独歩

田 山 花 袋

初めて独歩君と懇意ちかづきになった時のことから御話しよう。

独歩君が前の夫人と別れられたのは、確か二十九年の四月末、上野向島、さなきだに世は往く春の哀れ深い折柄であった、一度夫人に去られた独歩君の哀愁と煩悶とは実に非常なもので、令弟収二君の如きは、前夫人の正まさなき振舞を以って、拭い難き家門の恥辱とまで感じて居られた。自分の初めてお目にかかったのは独歩君と収二君と二人で、渋谷の侘住居わびずまいに自炊して居られた時であった。

丁度渋谷の道玄坂を下って、一寸左ちよつとの方へ入ると、直ぐ眼の前にずっと、爪先上りに傾斜地スロープが見えて、其の頂きには別荘風にしつらえた瀟洒しょうしやな家が見える。傾斜地は青草に蔽われて、其処彼処風情ある木立に点綴せられて居る。家の前には小さな葡萄棚が趣きを添えて居る。此が当時独歩君兄弟の、読書と瞑想とに清貧を楽しんで居られた家である。

其の頃自分は、独歩君の書かれた文章を「国民の友」や「国民新聞」などで読んで、如何にも清新な趣きのあるのに敬服して居たものの、まだ親しくお目に掛る機会を得なかったので、何時か折があれば可いと思って居るうち、丁度其の頃、宮崎湖処子が、渋谷のバレン屋と云う家で、「国民の友」の新年附録を書いて居られたから、太田玉茗君と一所に、一つ湖処子君を驚かそうと云うので出掛けた。すると、折悪しく湖処子は何か要事が出来て家に居ない。

頃は十月の末、秋晴の空藍の如くに澄んで、羊の毛のような雲が、所々に漂って、何とも云いようのない小春日和、此の儘帰るも流石に残惜しいような気がして、其の頃はまだ情熱の火に燃えて居る二人の若い青年は、各々得意の新体詩くちすまを口吟みつつ、脚を郊外に向けた。

湖処子と独歩君とは、民友社の方の関係から、其の頃は最もう深い懇意ちかづきであったし。兼々湖処子から、独歩君の宅も聞いて知って居たから、例の傾斜地の下まで来て、頂の家を見ると、急に会って見度くて堪らなくなった。稍色やがづいた木立の下を歩きながら、軟らかな午後の光りに輝いて居る小山の上を見上ると、葡萄棚の下に家の主人の立姿が見える。無礼も何も忘れて、坂道を走り上って、案内を請うと、主人はさも快活に吾々を其の書齋に導かれる。

家はもと別荘式に建てたもので、二室ふたまき限り、其処を借りて兄弟ふたりで、簡易な自炊生活をして居られる。談はなしに浮れて日の暮れるのも知らずに居ると、収二君が兼ねて用意のカレー粉で、ライス、カレーを拵えて、大皿に盛ったまま吾々の中へ運ばれる。四人で端の方から其をつつきつき平げながら、自然に就いて、文学に就いて、情熱センチメンタル的な青年の

物語りは尽るところを知らない。興は夜と共に深くなり勝って行く。其の夜の清興を想うては、今も若々しい青年の活気に満ちた独歩君の姿が、そぞろに眼の前に浮んで来る。

かくて自分は独歩君と知己ちかづきになり、忘れ難き友人の一人を得た。其の後は大抵一週間に一度位は遊びに行き、若し不在るすの時には上り込んで待つて居る。独歩君の隣りの家が牛乳屋で、取立の新らしい牛乳ミルクに角砂糖を入れて御馳走するのが、ハイカラな生活を知つて居られた独歩君の大に得意とせられた處で、田舎漢いなかものの吾々には、これが何よりも楽しみであった。

一度不在の時、上り込んで机の上を見ると、二葉亭の片恋が置いてある。主人公はまだ買った計りで読んで居ないらしい。所在なきの暇潰しに、二三枚読んで居るうちに不知しらず不識しらず吊込まれて終末まで読んで了つたが、自分が其時「片恋」によって与えられた感興は今も忘れることが出来ない。で、独歩君が帰つて来られてから、其の事を談すと、後に手紙で自分も同じく深い感じに打たれたと云つて寄された。

当時の独歩君の生活は、内部外部ともに次の手紙によってよく分かる。

拝啓

昨日の御来書にて、始めて君が熱病の由を知り、御互の突然の此不幸（当時独歩氏も熱を病む）を怪みつゝあり。多分詩集の事が（抒情詩）余り甘く運ぶが故に何者かのたゞりなるべしと存候。小生の熱は全く落ち平日の如く暮らし申候。たゞ少々用心致し居候間、まだ外出致し兼ね居候。明日は入社致し見んと存居候。君のはチブスにまで近き候はゞ、さぞ御事なりし事と存候。や、御快気とは何より幸に候。小生一両日中には必ず御見舞に出かけ申すべし。

色々様々の空想のみにて日夜を送り居り候。雄心磊々。詩情泉の如く湧き、想像鳥の翼を羨まず。たゞ如何にも術の及ばざるを嘆ずる事に候。小生をして追懐録を草せしめば、三部の別種にして而も詩趣に富めること相譲らざる製作出来上るべし。第一、は『若き田舎教師』といふ題目にて、豊後の一旧城下に於ける一年間の僕の遭遇観察を書かしめよ。第二、は『従軍記者』てふ題の下に、余が乗艦観戦五ヶ月余の見聞を書かしめよ。第三、は『わかき血』とか何とか題して、恋愛の始終を書かしめよ。此三つの者は悉く連絡せり。余にして此三篇を遺憾なく書き得ば、青年時代の作として満足する也。

されど思へばこれ実に老熟圓滿の筆を要す。多分幾十年後の追懐録たるに過ぎざるべし。余は此三篇の事実を少しづつ書きとめ置かんと欲す。大体は悉く日記あるが故に（欺かざるの記）困らず。余の『欺かざるの記』は余が写真の一部なり。余は別に一編の大長編を構案しつゝあり。これも亦た五年前の見聞を詩化美装せしものゝ、余は純然たる空想を以ては容易に何者をも造くる能はざるが如し。余は実に詩人てふ事を満足し得るが如し。余が胸には野心の火もゆ。余が心には理想の光みつ。余が眼は高く上帝を仰ぎまつ。余が為さんと欲する處はたゞ人生の批評、描写、教訓に外ならざらんか。しかしこ

れも青年の夢か！夢よ夢よ！楽しき夢よ。余は此夢にて満足す。

僕は此家を好愛する愈々深からんとす。人々は頻りに都に出でよとす、おれども容易に余は之に従はざる也。夜は更けたり。聞き玉へ、あの風の音を、梢をわたる風の音を。あゝ此静肅寂寞の居を占め居る余は幸なる哉。読み、読み、読み、而て書き而て觀み、而て書き而て読む。僕の仕事は是れに過ぎず。恋愛の夢もさめぬ！思へば思へばくやしくてたまらぬなれどわが心は尤も甘き泉と尤もにがき杯とを飲みたれば其味は貴き経験ゆへせめてあきらめ居る也。

余は女性を信愛す。されど当世多くの乙女を容易に信ぜざる可し。彼等の心にはそろばんあり、之れ事実なり。泣くべき哉。君は恋愛を恋愛しつゝあり。余の如し。たゞ君のは哀れに悲しく楽しく。余のは悲しく苦るしく心も狂はんとす。人はわかき中に死たきものなる哉、わかき中に！恋の夢の中にて。達人とかには成りたくもなし。

君の詩、今度の國民之友にのせたり。多分収二より送本せし事と存候。「月の夜」は吟ずれば吟ずる程情熱を加へ来るを覚ゆ。今日頻りに高吟したり。今夜もねる前には今二三度は此静けき茅屋の中にて悲しき高き心いだける人のために歌はるべし。げに之れ君の傑作の一ぞかし。余はかの詩集落成の日吾等相集りて皆々得意の作を朗吟する時を夢みつゝ、樂み居れり。余は君のために此作を朗吟すべし。あゝ、其日其時は如何に樂しかる可き。夢よ夢よ。永久にさむる勿れ。草々

一月三十一日夜十一時前十五分

哲夫

録 彌 様

此の手紙でも分る通り、其の頃はまだ失恋の夢が全く覚めず、或時自分に、木枯の吹きすさぶ寂しい丘の上の孤屋ひよつやに寝て居ると、時々落葉の音に目覚めて「おのぶ」さんが帰って来はしないかと疑うことが屢々しばしばある。若し今お信さんが帰って来さえすれば、其の詫言の前には一切の罪を許してやると言われたこともある位で、さしものに烈しかった煩悶も漸く鎮まり、心のうちはさながら冬枯の野の如く、荒涼寂寞を極めたものであった。で、吾々は其を慰め其の心を転じさせる為めに、芸術を勧め、氏も新体詩など作って自ら遣り難き情を遣って居られたが、武蔵野の野末の独居ひとりいに堪え兼ねてか、旅に出て見たいと始終云って居られた。露伴氏の「枕頭山水」を読んで愈々旅行の念が高まり、遂に二人で日光に往くことになった。

※本文の表記は、新漢字・新かな遣いに改めた。

※文中の独歩書簡文には、花袋によって句読点の追加や追記が施されているが、そのままにしている。

※出典「翻刻 趣味拡大号 文豪国木田独歩」昭和54年9月25日/明治41年8月1日